

## 〈講演 1〉

# 日本の教育の課題と展望—大学に求められるもの—

法政大学教職課程センター長 尾木 直樹

こんにちは。「尾木ママです」といつも始めるんだけど、今日はそうはいかないので、尾木直樹です。センター長を仰せつかっています。よろしくをお願いします。

もう 8 年もお世話になってきましたから、人情に厚い尾木直樹ですので、センター長を引き受けて、とにかく法政だけでなく全国の私立大学の教職課程のパワーアップにつながればいいなと思って、頑張ろうと思います。

法政大学の建学の精神は、「自由と進歩」です。自由もないところに進歩は一切ないということですね。そういう意味では、教師に自由がなかったら、学校に実践の自由がなかったら何の進歩も起きないと思っています。

そういう「自由と進歩」を掲げた法政の教職課程で学んでくださって、全国に教員となって散っている方がたくさんいます。僕も全国からお声がかかりますと、「法政の出身です」とか、大学の学長なんかもあいさつに来てくださいます。そうするとすごく嬉しいのですが、そういう方々が首都圏だけでも 1,000 人ぐらいおられます。それも総集して、悪い意味で固まらないで、パワーになっていきたい。

もちろん今、現場の大学生の教職課程で履修、実践など、いろいろな領域を今まで以上に充実させていく。それから、法政は多摩と小金井と市ヶ谷とキャンパスが 3 つに分かれています。その力も統合して、うまくいけばいいなというふうに思っています。

今日は時間が 50 分しかなくて、その中で僕に与えられたテーマは「日本の教育の課題と展望—大学に求められるもの—」と、もの

すごく大きいのですね。これ、どうしようと思ったのですが、ほとんど無理ですね。僕、無理なときはどうするかというと、諦めるんですよ（笑）。そうしないと、命がもたないものですから。

本当は今日、大学の教職課程センター長として話さなければいけないから、ちゃんとレジュメを作って、1 枚ぐらいいは渡しますと言っていました。そうしたら、大津のいじめ問題で忙殺されてしまって、それで何とか、前日か一昨日あたりに作ろうかなと思っていたら、今度は第三者委員会の委員をやってくれという話が漏れてしまったんですね。そうしたら、またマスコミに殺されてしまって、昨日は 2 分刻みでコメントを出したぐらいです。こんなに激務というのは、生まれて初めてです。起きてからずっとしゃべり続けているという感じで、本当に準備ができなかったのですが、生のことを伝えていこうと思います。

## （1）大津のいじめ事件から見えてくるもの

まず、今回の大津のこの事件の問題ですが、大きな特徴があります。

いじめで不幸な事件というのは、戦後、何十件も起きているんですね。10 年間で約 20 件ぐらい起きた期間もありますから、大変な、深刻な事態です。さらに今回は大きな特徴があるんですよ。

一つは、いじめの様態のあまりのひどさ、残忍さです。これは本当にひどいです。

1986年、鹿川君事件という、中野の中学2年生の男子生徒が葬式ごっこが引き金になり、「このままじゃ『生きジゴク』になっちゃうよ」という遺言を残して自殺をするという事件がありました。

そのときからいろいろな対策が進められてきたのですが、いじめの形の中でも一番深刻なのは何かというと、今回は、いじめ自殺練習。自殺の練習をやらせた。これは証人も出てきて、実際にどういう形でやっていたのかが明らかになりましたよね。それから最もやってはいけない、葬式ごっこです。

葬式ごっこがどうして致命的な影響を与えるかというのは、皆さん、わかりますか。自分はいないという前提での遊びなんです。いないんです。そういう遊びをされるわけです。そこでの自分の居場所のなさ、寂しさ、しかも、何回も自殺の練習までさせられているわけです。このひどさです。

それから、2つ目は何かというと、学校と教育委員会の隠蔽体質という問題です。これまでも基本的に、だいたい学校というのは隠蔽してきました。教育委員会も隠蔽するのが特徴なんです。大津の場合、事実を隠蔽するというのも、たくさんやりましたよね。それから、もう一つ新しい隠蔽も始まっています。それは何かというと、出てきたことを追及していかない。真実を明らかにしようとする隠蔽です。だから、せっかく女子中学生から出てきた証言なども聞いていない。聞きもしない。都合の悪いところは全部確認をとっていかないなど、そういう新たな隠蔽が出てきたのは、非常に深刻な事態だと思います。

それから、3つ目の問題は、加害者側の問題です。これは個人攻撃になるといけないのであまり言いたくはないのですが、裁判になった今も、加害者側の親御さんは自分の子どもは遊びでしていた、あれはいじめじゃなく遊びだというふうにおっしゃっていましたよ。

ね。そこも争点になる予定です。これも今までになかったなと思います。

決して加害者のご家庭を攻撃するわけではないのですが、そうってしまった背景はいったい何だろう。家庭教育とか、そういう親御さんの価値観を作ったものというのは、皆さんと大して変わらないはずなのに、いったいどうしちゃったのかなと思います。

それから、警察の問題とかもいろいろありますが、本当に今回は深刻で、ここの問題を読み解いていだけで、実は今日のテーマをそのまま語ってしまうほど、教育問題をすべて含んでいます。

事件が起きた学校の先生は50人いるわけですが、全然真実を語ってくれないし、こちらが呼びかけても、匿名性があるインターネットを通して何もお答えにならないという状況ですね。これはどうしたのだろう。この言論封鎖というか、箝口令が何かわかりませんけれども、すさまじい状況だと思います。

僕のブログは、この12日間ぐらいで、350万件ぐらいアクセスがありました。僕は先生方とかいろいろな方にも呼びかける書き込みをしています。「先生方、一緒に考えましょう」というのに、返ってきたのは、たった2人です。

これだけ大量に、国民的に悩んでいるのに、学校の先生は語らない。語れないのか、語ったらまずいところに置かれているのか。だから、この状況がやはり日本の教師教育だとか、そういうことを語る前の最も深刻な事態をあらわしていると思います。

日本の教師が本当に子どもたちの心がわかって、子どもたちの幸せを願っていたら、こんなことにはならないはずなんです。我が国の経済的な活力やいろいろなことも含めて、こんなに沈滞するわけがないのですが、日本の“病巣”になっているのは教育のところだと思います。教育がすべての足を引っ張っていると思います。

教育を取り巻いている情勢で、国際的に大きな変化は人材育成の国際化です。国境なき人材育成が進んできている。それに日本が完全に足をすくわれていきます。そういう状況になっているから、例えば東京大学の秋入学の提起などもその一環としてあるわけですが。

## (2) 「人間教師」を目指すこと

僕はわからないことは何でも子どもに聞いてみるというのが、昔からのスタイルです。

水曜日に教職入門という授業を持っています。300人ぐらい受けているんですけども、今度この講義があるから、学生に、教師教育にとって重要なことは何ですか、どんなことをやってほしいか書いてみなさいというのを、質問項目で一つ起こしたんですね。そうしたら書いてきてくれたんですけども、面白いですよ。しっかりしているんです。

今年の大学1年生の特徴、これは法政大学だけではありませんけれども、ものすごく真剣で、レベルが高くなりました。2段ぐらいステップアップした感じです。僕のゼミの学生、3年生、4年生も素敵なのよ(笑)。素敵なんだけれども、それよりもさらに2段、3段すごいんです。何が書いてあると思います? どこがすごいかというと、生きるということ、それから、人との関係性において、ものすごく誠実で真剣なんです。これが大きな特徴です。

2011年3月11日の東日本大震災以降、学生の生き方が急激に変わってきました。日本全体もそうですけれども、すさまじく変わりました。300枚ぐらいある試験の解答用紙、すべてお見せしたいぐらいです。これまで20年ぐらい大学の教育に携わっていますが、最高にきれいに丁寧にしっかり書いています。どれもすごい。面白いんですよ。

僕の授業の試験は、裏表解答用紙があるものですから、汚い字で書かれると読むのが大

変だからと思って、そういう意味で、一番最初のところにこういう注文を書いたんです。

「以下の各設問にわかりやすく、読みやすい文字で解答せよ」。そうしたら、皆応えてくれて、一文字一文字がものすごくきれいなんです。お習字のようにきれいに書いてくれている。

だから、こちらから呼びかければ、今の若い人というのは伝わるんです。それを、「今の子は駄目だから」と言っていると、いつまでたっても駄目。

そしてその中身は、どれを読んでも、ここへ持ってきたいものばかりなんです。そのうち、今日は2つを持ってきました。どんな教育をやってほしいのかというので、読んでみます。こんなふうには書いてあります。

「今の教師に圧倒的に足りないものは、生徒の気持ちをわかろうとする姿勢だと思います。生徒が発しているさまざまなサインを読み取る技術や知識が圧倒的に欠如していると思います。私はそれは実践の中で学ぶべきことだと思うので、教育実習の期間をもっと長くするべきだと思います。そうすることによって、熟練した状態で教師になることができるのではないかと考えます。生徒と教師の信頼関係を築くことは、授業のうまい下手よりも大事なことに思います。学校の教師だからできること、そこのことに注目して、これからの教師教育をやっていってほしいと思います」。

こういうふうにする。つまり、人間教師を目指したいということなんですね。教師の人間力をアップしていくべきである。それを求めているのが、全体としての大きな特徴でした。

そのことを、次の子なんかは、はっきりと言葉で言っています。

「私は教師教育については、教師の人間性を養うことが一番大事であると考えている。私は社会科の教師を志望しているが、目指してい

るのはコミュニケーションのある授業だ。社会の授業は先生が淡々と説明して終わりということがよくあるが、私は生徒と相互にコミュニケーションをとりながら授業を進めていきたいと思う。なるべく質問や発問などをしてしやすい環境を作り、生徒たちのリアクションを大切にしていきたい。授業の雰囲気を作るのも先生の技量の一つだし、それは人間性が大きくかかわっていくと思うので、大学では知識だけではなく、豊かな心を身に付けられるよう努力していきたい。

やはり、人間教師。全然新しいことではないのですが、人間教師を目指していきたい。心のある人間力豊かな人たちがやはり必要ではないか。そういうふうになっていきたいということを言っています。

このように、技術だけではなく、心の豊かな教師を目指したい。つまり、人間教師を目指していきたいということを強く言っている子が非常に心に残りました。

### (3) 日本の教育の国際的遅れ

今、学校の抱えている問題で一番大きいものは何かと言いますと、日本の子どもたちが幸福感を持ってないということです。幸せな感覚を持ってないということです。これはご承知の方もおられると思いますが、2007年2月にユニセフが発表した子どもの幸福度という調査があります。OECD25カ国が参加してやった幸福度調査、「自分は孤独だ」と感じるかの調査です。その中で、孤独だと感じるという子は、国際的な平均でいうと、だいたい5~10%、1桁台なんです。

一番低い国はオランダで2.9%。我が国はどうなんだという、ダントツの1位なんです。29.8%、約3割近くの子が孤独だという心情に陥っているわけです。15歳の段階です。2位の国がアイスランドで10.3%です。だから、2位の3倍、一番幸せ度が高そうなオラ

ンダの10倍日本の子どもたちは不幸だということなんです。

国際調査のそれだけではなく、これは国内で文科省がとった、うつ病と躁うつ病の調査でも明らかになりました。

北海道大学の傳田先生という医学部の教授ですが、6人ぐらいのチームを作って、小学校8校、中学校2校に全員問診に入るわけです。問診に入った結果、中学1年生までのデータが文科省からも発表されましたけれども、うつ病と躁うつ病の有病率という数字が、なんと10.7%です。10人に1人が心の病気なんです。

このことは国連から10年も前に指摘されていました。日本の今の教育体制をそのまま貫いていったら、子どもたちが精神的な疾患になっちゃうよ、そういう厳しい言葉で日本の教育、システムそのものを批判しています。それに対して文科省は何のリアクションもしていかないという状況が、ずっと10年以上続いてたんですね。

だいたいどの調査をやっても、15歳で30%ぐらいの子が心を病んでいるというデータが、厚生労働省からも県調査で出てきます。まだ、本数は少なくても3本くらいしかないんですけども、深刻な事態です。

それ以後、国際社会のほうで日本の子どもたちを心配してくれて、日本の問題が国連の中でも集中して討議されている。毎年という言い過ぎですけども、毎年のように日本に対して、教員の評価に問題があるのではとか、予算の配当が教育に少なすぎるのではないとか、いろいろな勧告や文書が日本向けに出されています。なかなか浸透していかないんですけども、そういう意味では日本の教育は今、世界で最下位クラスだと思ってください。

それを形成してしまっている要因の一つは、ものすごく人材育成のグローバル化が進んでいるのに、日本が島国でその影響を感じてい

ないということです。遅れてしまっているんですね。

そして、相変わらず一斉主義で、競争主義で、数値目標を掲げて競争原理に従ってやっています。全国学力テストをやったり、いじめの数を5年間で半分に減らすという数値目標を掲げて、実際は50件もあるのに0件と報告したりとか、末端の全国3万の小中高校から文科省も含めて、うそばかり発表して、そして、「よくやった」と言っているわけですね。こんなシステムができてしまっているんです。本当に異様だと思います。

いじめの件数だって本当にでたらめなんですよ。現場の先生に聞いてみますと、50件あったのが0件とか1件と報告するのが常識になっています。それが集約されてきたのが文科省の発表する14万何件という数字です。本当に大変なことになっているなと思いますね。

今の日本の教育の一番の問題点で言いますと、人材育成が国境を越えてグローバル化しているのについていけないということです。それは競争を促すという意味ではなくて、キーポイントは、僕もいくつかの国に視察に入りましたが、インドも含め韓国や中国などのアジア諸国でも、2005年、2006年あたりに教育改革が終わっているんですね。その中核は何かといたら、民主主義的な子どもをどう育てるか、探求型の学力形成をどうするかということに焦点が絞られているんですよ。

お隣の韓国なんか、あれだけ受験が過熱している、日本以上だと皆さん思っておられるかもしれませんが、高校入試は法律で禁止されているし、私立小学校の入試もやってはいけないんです。なぜかという、入試をやってしまうと、塾に行くことのできるお金持ちだけが勝つからです。塾の経営も夜10時以降は禁止です。

でも、これは建前で、実際はもっとやって

いる人もいっぱいいるようだけれども、教育の公平化をスローガンにしています。貧富の差で教育に差が出てはいけない。やる気と能力ある人はどこまでも伸びる、そういう教育体制をとろうというので、韓国では今すごい教育熱が盛んで、留学なんかもすごくしていますよね。でも、お金持ちでなければ留学できないのではなくて、国内に英語村という施設をつくって、お金がなくても留学と似たような経験ができるようにするなどして姿勢を示しています。

それから、驚いたことに、中国なんかは本当にすごいんです。僕は中国はきつとごまかしているんだろうと思って、その裏を暴こうとも思って上海に行ったんですが、とんでもなかったです。

総合的な学習、探求型の学習をものすごく充実させて、それぞれの現場の学校が自由裁量でカリキュラムを組めるようになっているし、何よりも教員をものすごく大事にしているんですね。例えば教員の週当たりの持ちコマは、上海でいえば最多が14コマです。日本の教師は何コマ持っているのかな。卒業生は29コマ持たされているんですよ。僕が取材させてもらった先生は週8コマでした。そのかわり、勉強のできない子を残して、夜の10時まで面倒を見ます。わかるまで徹底して見ます。

韓国もそうだけれども、例えばパソコンで授業を、30人でやりますよね。開けている画面が全員違うんですよ。自己決定、自主自立というスローガンをあちこちに掲げていて、自分で決めなさいということがうんと強調されています。だから、練習問題も自分で決めます。自分でどこをやるのか。やっているのは、例えば掛け算なんかですが、問題は好きなものを選んで各々パソコンでやるわけですね。

すべてのところでどうやって自主的に、自己決定の力を育てていくかというのは、韓国

にしても中国にしても、すごく重視されたシステムになっているんです。

やはり教員の数も多いんですよ。僕は教育委員会の方に質問しました。「お金がすごくかかるんじゃないですか」と言ったら、「今、政府は教育改革に糸目をつけないでお金を投入しています」と言うんですね。今、第3次教育改革だったか、10年計画で2010年から2020年に向けて総力を挙げています。総合学習の中の学力形成です。問題を解決する能力ですね。

日本はかなり厳しいなど。日本でやっているのは、必ず数値目標を掲げて、そしてそれがどこまで達成できたのか、順位を全部発表し、学校の先生方や学校ごとに競わせていくという形になってしまっていますよね。

#### (4) 欠けている教師の協同性と自由

こういう点で言うと、やはり先生が人間教師として豊かに育って行って、子どもたちと遊んだり何かできていくということ、子どもの心を理解したり、「あ、これはプロレスごっこじゃなくていじめだな」など見抜いていけるのは、普段の接触がものすごく重要だと思うんです。

今の日本の教師に欠けているのは何かというと、大津のこともそうですけれども、一つは協同性というのがほとんどないということです。特に中学校というのは協同性を抜きに教育実践はできないんです。

小学校は担任の先生がしっかりしていれば、全教科見ているし、給食もそれぞれ見ているから何とかできるんです。

中学校は教科ですから、例えば体育の男の先生なんかだと、自分のクラスの男子20人ぐらいしか面倒を見ることができないからわからないんです。いろいろな先生の知恵や情報を集めてこない、いい学級も作れないし、学年も作れない。だから協同性というのは、

中学校や高校では命のように大事なんです。

例えば、今回の大津のいじめ事件の学校が保護者説明会をおやりになりましたよね。学校の説明が30分ぐらいあって、それから次に質疑応答に入ろうとしたときに、保護者から「黙とうしないんですか」という声が出てきたでしょう。見てくださいよ。黙とうしないで保護者説明会やるケースなんてありますか。非常識もはなはだしいですよ。

僕も教務主任を長くやっていたのでわかるのですが、こういった説明会の段取りの原案は必ず職員会議とか朝の打ち合わせで紙が配られているはずなんです。

そこでペーパーが配られて、最初に「黙とう」と書いてあって順番にやっていくのであれば、皆で合意するわけですよ。50人いたら誰かが気が付くんですよ。「黙とう」って書かなかったんですかと。そうやって確認していくのに、漏れてそのまま行ってしまうわけですよ。僕の感覚では、あれはあり得ないです。

だから、協同性、皆で力を合わせて成功させて、一つひとつ行事をくぐり抜けていくんだということができていないというのが、わかりますよね。

そういう協同性が弱い中で仕事をする先生方はものすごくきついですよ。だから声を上げられませんが、心で泣いている方は何人もいると思うんです。

ですから、第三者委員会の委員になったら、その先生方を勇気づけてあげる、気持ちを聞き取ってあげる、元気を出してもらおうということも大事だなとは思っています。

協同性が全然なければもうお話にならないということです。そこへ、くさびを打ち込んでいくような、例えば教員評価制度、学校評価制度だとか、学校選択の自由だとか、こういうのにつながっていったときには完全に学校が機能不全になっていくんです。

それからもう一つは、余裕がない、ゆとり

がないということ。どこの学校へ行っても先生方はゆとりがなくて、忙しい忙しいと言われるでしょう。本当に余裕がありません。やっぱりゆとりを早く回復しなければいけません。

それから、この間、大津のいじめの記者会見を見ていてもすごく違和感を持ったんですね。何かというと、クールビズのまま校長も教育長も出てくるんですよ。今日はクールビズでもいいと思っているんですけど、あの場面では厳粛に、やっぱりスーツを着てネクタイを締めるべきですよ。それが社会的な常識ですよ。でも、何回記者会見やってもクールビズで出てくるんですね。それは閉じた世界でのモラルなんです。クールビズでいきますよと市が決めたから、クールビズでやってしまうわけですね。

でも違うんです。国全体、国民全体に向けてカメラを通してちゃんとメッセージを出そうとしている、説明しようとしているときにクールビズはないと思いますね。命がなくなっているという問題ですからね。

やはり市民生活をしっかり保障するということが、文化的な生活を保障するというのも、ものすごく大事です。お芝居や映画を見に行ったり、サッカーを見に行ったり、先生方もそういうことでいっぱい動かなかったら駄目ですよ。人間教師として育っていかないと、思います。

それから、何よりも、実践の自由があるということ。実践に自由がなかったら教師は窒息死するだけです。上から下りてくるものをそのまま一言一句たがわず伝えていくというのは、これは本当に民主主義の自由主義圏の日本とは思えないやり方だと思います。

## (5) 教育にもっと予算を振り分けること

こういう中で、では、どういうふうにして

いけばいいのかということですが、具体的に方法論で言いますと、一番大事なのは、これは学校の先生方の努力目標ではないんですけども、やはり教育予算をもっと投入すること。教育にお金を使うということです。

2010年9月にOECDが日本向けサマリーのタイトルに「教育は未来への投資である」と書いたんですね。はっきり言って、失礼なタイトルだと思うんですよ。「教育は未来への投資である」、そんなこと当たり前なんです。でも、我が国では教育政策で全然それに気が付いていないから、わざとそんなタイトルをつけてくれているんですね。そして、大学の授業料も無償にしたほうが、実はかけたお金に対して3倍ぐらい元へ戻ってきますよと計算までして、ちゃんと数字を出してくれています。

これも僕は盛んに言っているのですけれども、大学教育に授業料がかかるような国は結構あるんですけども、それを無償化すると宣言をしていない国は、日本と、東アフリカにあるマダガスカルのたった2カ国なんですよ。

つまり、教育というのは、皆が私費で負担して自己責任で買うものではない、国家にとってのライフラインだという位置づけがOECD諸国を含めて、世界の共通認識なんです。教育に個人のお金はかけるものではない、かけるのは国であって、そうしなければ、今、世界の人々は生きていけないんだという認識です。

「知識基盤社会」というのは文科省もよく引用しますよね。あれはOECDの基本的な国際情勢の分析の第一の視点ですが、知識が基盤になって動く社会なんです。そのときに、お金持ちは知識を買えるけれども、能力もあるし意欲もあるのに、貧乏人は買えない。そんなことをしたら、一番もったいない。どんな方も意欲と能力があればどんどん伸びていく、そういう教育体制をとっていかなければ

ばいけないのに、日本はとれていないから、就学前の私費負担率から高等教育の大学の私費負担率も世界3番目なんですよ。平均値の2倍以上なんです。大学なんかは、我が国は64.7%私費負担ですね。だけれども、国際社会の平均は30%なんです。就学前も同じです。もう教育はお金で買うものになってしまっている。これは非常にまずいですよね。

教員の数だけ増やして、中国みたいにやっていけば一気に変わります。先生の持ちコマ負担が29コマじゃなくて10コマでよければ全く変わるでしょう。いじめだってすぐに見えますよ。一緒に子どもと遊べるし、教材もプリントも手づくりでやれる。中国なんかは予習プリントも復習プリントも、わら半紙で刷った全部先生方の手づくりです。全部手づくりで授業を作っていくわけです。

だから、まず、やはり教育を大事にしようというところの合意形成というのがどうしても大事だと思うんです。そのことを国民に信を問えば、おそらく多くの方がもっとお金を使ってもいいよと言うと思うんです。消費税上げていいよと思っていない人だって、「教育のことにもっと使え」と言えば、カンパしたいという人はいっぱいいると思いますよ。尖閣諸島買い取りも14億も集まったみたいですしけれども、教育も集められないかと思いませんか？「尾木ママ基金、100億集まりました」とか(笑)。

教育のところにはお金がかかるわけです。そして、見返りというか、費用対効果がきちりと出てこないのが教育の特徴なんです。それを求めてしまったのは、2000年代でしょう。それで、例えばセンター試験の受験率を何割にするとか、六大学に何人合格させるとか、それから、英検2級以上を20%以上とか、全部数値目標でしょう。そして、それを3月に発表して、学校選択の自由の下で、さあ、私の学校こうですよ、お母さん方選んでくださいとなるわけでしょう。そこでいじめが50

件ありましたなんて、そういう項目はありませんけれども、入ってきたら選ぶ人がいなくなるわけですよ。だから全部見えなくなって、って、真実はうずもれてしまう。先生方だけが苦勞している。

本当は親は申立てるのではなくて、先生と親御さんや地域の方は協同生産者なんです。一緒になって〇〇中学校の教育をよくするし、子どもたちの学力や、いじめもなくしていくというのは皆でやらなければいけない。それが分断されてしまっている。そういう中での先生の今のつらさというのがものすごく大きいと思います。先生のつらさは、また皆からさらされているというか、パッシングされているみたいなところです。僕もときどき批判しますけれども、それは善意で言ってるのよ(笑)。

## (6) 評価制度を変える

それから、学校評価や教員評価は今、2007年以降、全国に貫かれているのですよね。やっていないところも片手で教えられるぐらいあるんだけど、言った途端に文科省から攻撃されるからか、いっさい出てきません。

人間教育のいい雰囲気だなと思うと、そこは、ちゃんとやっていないんです。不思議ですよ、これ。「先生、これ、内緒にしてください」とかね。試行中を何年も続けるの。知恵者だなどと思いませんか？「本県は今、試行6年目です」とか言って(笑)。試行というのはやっていないということなんです。

そうすると、すごく雰囲気がいいんです。県の教頭会の大会に行っても、ものすごい生き生きしているんです。教頭さんなのに目が輝いているわけです。だいたい副校長とか校長さんって目に元気がないでしょう(笑)。ここへ来られるような人は違いますからね。でも、それが生き生きしているから、何だこの県はと思ったら、そういうことなんです。

だから、教頭先生も楽なんです。皆、職員室で仲間なんです。評価制度が入っていると、教頭先生は先生たちを全部評価しなければいけないんです。一次評価で教頭、その次は校長、それから教育委員会ですね。

そういう点でいうと、まず評価制度をすっかり変えるということです。いじめが 50 件起きたからまずいのではなくて、50 件も見つけて、そして、そのうちの 45 件を解決した。あと 5 件も親と一緒に解決できそうになっている、そこを問わなければいけないんです。

海外の評価制度は、成長してよくなっていく発達保障の観点から評価しているんです。日本は違うんです。行政管理の視点から評価をしているんです。だから苦しいわけです。校長先生もきついし、先生方もきつくなる。そして、教育委員会だけがのさばるという形になるわけです。

だって、教育委員会を評価する人がいないんです。教育委員会が、評価する人だけになってのさばっちゃったんでしょう。教育委員会の人、悪い人はいない、皆いい人なんだろうと思うんだけど、でもいい人だと思う人に会ったことがない(笑)。皆いい子で、教育に燃えていたんですよ。僕の卒業生と同じです。それが何かおかしくなっちゃうんですね。

どうしておかしくなっちゃうか、大津の第三者委員になったら、そこも分析してみたいなと思ってます。嫌でしょうね、たぶん僕が行ったら本当に。ますますごまかせないですよ。だって 22 年間、中学、高校の教員やっていたでしょう。玄関入ったらすぐわかる。目が合ったらわかるのと一緒よ(笑)。

## (7) 教育実践の自由と入試の仕組み

それから 3 番目に、やはり大事なのは、先生たちの教育実践の自由です。自由というのはものすごく大事なんです。自由があるから、

教材や教科書を自由に作っていい。

今、検定教科書制度をとっていますけれども、それがあつたとしても、もっとどんどん自由に副教材とかを教材として大量に作ってあげたいと思うんです。教育委員会が管理するのではなくて、教材開発センター的な役割をもっと担って、「あの学校で尾木さんたちがこんな教材作ったよ」「このビデオ面白そうだよ」などと、全部センターに集まってきて、相互交流ができて、いいものがどんどんできていく。それをサポートするのが本当は教育委員会だろうと僕は思うんです。

やはり教材などの自由な開発、それからセンター化ということですね。これを進めると先生たちはすごくたくさん考えるでしょう。

教科書検定があつてそれに通つたものに従ってやっていくというのは、時代遅れもはなはだしいんです。オランダなんて教科書がないんだから。教科書を使わない国はたくさんあります。

日本だって江戸時代の寺子屋は、教科書は幕府の決めたものなんてあるわけないでしょう。往来物といいますけれども、だいたい 7,000 種類も使っていたんですよ。師匠が作る手づくりの教科書も含めれば、7 万とか 8 万とかいわれる数なんです。もともと日本は個別教育から始まっているんです。今の一斉主義の団体訓練的な手法ではなくて、もともと江戸時代は個別教育だったんです。

だいたい全国に 5 万ぐらいの寺子屋があつたといわれるでしょう。今の小中学校が 3 万ですから、いかに多いかということ。人口がもっと少ないですからね。5,000 万、あるかないかでしょう。

だから、日本の教育の伝統というのは江戸時代からものすごいものを持っているんですよ。それから、戦後の国語の綴り方教育だとか、いろいろな財産がたくさんあります。これをフルに保存・整理していたら、日本はものすごいものができると思います。外国の真

似をそのままするのはなくて。

「教科書検定をなくして」と言ってしまうと、なくなるまでが長かったりすると、その間、空白になって、先生方は苦しむんです。そうではなくて、やれることからまずやっていく。そして、ああ、教科書いららないな、検定もいらしないんじゃないのとなれば、それにこしたことはないです。だから、運動論的かというと、まずなくしてからというのではなくて、私たちは成熟した市民ですから、やれることをやっていきましょうと思います。

もう一つは、ヨーロッパなんかで言いますと、大学入試をやっている国はほとんどありません。オランダなんかは、医学部も抽選です。それで何ら問題も起きない。

なぜかという、これは学力論との関係がすごくあるんですけども、日本は一億総学力を上げようと思って、全国一斉学力テストをやったり、さまざまな工夫をやっていくでしょう。これを、あと1,000年今の方式を続けてやっても絶対に学力は上がりません。だって、理論的にも制度論的にも上がりようがないようなものを行っているんです。

諸外国はどういう制度かという、習得主義なんです。日本は履修さえすればいいんです。6年間学校へ行けば小学校卒業です。3年間中学校に在籍して、行かなくてもとにかく卒業なんです。

だから、国だとか学校は、A子ちゃん、B子ちゃんに学力をつけて卒業させようとは、本気で思っていない。個々の先生は思っているんだけど、システムから言えば、つくわけがない。日本の場合は履修主義とか学年主義、年齢主義といいます。年齢が来たところてんのように卒業できる。中身は問わない。けれども、多くの国は習得主義で、習得したら卒業していく。習得させることに総力を挙げるんです。

だから、大学で入学試験をやらなくても、学力がついているんです。もちろん10点満

点で医学部は8点だとか、他の大学は6点台とか、一応の基準がありますけれども、その子に応じて学力をつけていく。

オランダばかりになります。この間、テレビ番組のロケでオランダの学校を視察させてもらったんです。あそこは3歳8ヵ月ぐらいで体験入学が始まって、4歳から小1なんです。ヨーロッパの国はスウェーデンやデンマークなど5歳レベルで入っていて、韓国も今年から5歳なんです。

日本の教育は、何回も言いますが、はっきり言いますと、むちゃくちゃ遅れています。教育立国で、前はよかったんですけども、今は本当に最下位の国家になっています。学力の構造度も構造になっていないんです。

オランダが、どうして試験をやらなくて済んでしまうのかといたら、高校の卒業認定資格というのがものすごく厳格なんです。同じ国語の読解力といっても、詩、論説文、古文だとか、いろいろなそれぞれに応じた指標がきめ細かく決まっています。国語の先生がそれをクリアしたか徹底してチェックします。だから、オランダでは、高校の先生が一番大変だと思います。日本は高校の先生って、小中に比べたら結構手を抜いているでしょう。付属の高校は違いますよ。ものすごい頑張っています。

それから例えば、有名なのはフィンランドですが、フィンランドは15歳で卒業しなくてもいいよと、1年ぐらいの猶予があったっていいじゃない、16歳までいても、勉強したい子はもっとゆっくり勉強してもいいよとやったら、「僕も残る、中学卒業するの嫌だ、もう1年勉強させて」と、70何%が留年を希望してしまって、先生が慌ててしまったそうです。そんなに残られたらお金がなくなってしまいます。

それぐらい子どもたちは、卒業することに意味を感じているのではなく、学びたがって

いるんですよ。そして、賢くなりたいし、見通しをつける力など、いろいろなものをつけていきたいと思っているんです。

そういう点でいうと、卒業資格認定を重点的に高校でやるというふうにしていけば、大学の試験なんか、はっきり言ってやらなくてもいいんです。

だから、日本も15年計画ぐらいで、何年には大学入試を廃止しますというようなビジョンを出してしまっただけで、そして、義務教育段階からいろいろと整理していけば、日本の教育は一気に変わります。

ただし、あまりにもショックが大きいから、なるべく下から、義務教育課程から習得主義に切り替えていくとか、教材開発の自由を認めていくというような、できるところからやっていって、そして、最後の穴を突き破っていく。そういう手法でないと、政治にだけ依存していくわけにはいかないですね。そんなふうに思います。我々成熟した市民がやることをやっこう。

## (8) 保護者と生徒の参加制度を

それから最後、これも世界の常識になってきているのですが、日本はみじんも進歩していません。今、法政の中高あたりで一生懸命やりはじめて、研究していますけれども、保護者、生徒の教育・学校運営の参加の問題です。三者協議会とか四者協議会とか、いろいろな言い方はされていますが、こんなの世界の常識です。保護者と教員がそれは当然の権利としてもあるし、そういうふうにしたほうが学校は楽なんです。隠蔽する必要がないんですもの。だって、親御さんたちだって、生徒たちだって、これでいくと決めたじゃないか、先生たちだけが悪いわけじゃないよと言えればいい。つまり、決定した人が皆責任を感じてくれるから、自己責任感が出てくるわけです。だから子どもたちが、運動会やいろい

ろな大事な行事にしても、全部子どもと教員と保護者の三者で決めていく。

変な言い方をすると、そのほうが得なんです。そんな進んだ考え方とかではなくてね。だって、うまくいったら「やっぱり僕が決めたからだ」と喜ぶでしょう。保護者だって、「私たちがあれだけ夜3回も集まって決めただけのことがあったわ」と、すごく喜ばれる。

うまくいかなかったとき。これもとても便利です。「ああ、私たちが決めただけでも、先生たちの主張をもっと取り入れればよかった」とか「先輩を呼んで聞いていたあの話にしておけばよかった」とか、こういうふうにして自己責任感が出てきますから、自分たちで責任を背負ってくれるんです。そして次、来年はもっといいものにするよという意欲が湧いてくるわけです。

それを教師が全部やってしまっていたら、「何だ、今年の学年の先生は駄目じゃないか」とか「先生たちが全部やってこうなったんじゃない」とか、人の責任にしてしまう。

だから、やはり自分で決定し、子どもたちや保護者も参画してやっていく。いろいろなやり方があると思いますが、それは国や地域によっても違います。基本的な理念、方向性は子どもや保護者参画で学校をつくっていかなかったら成り立たないですよ。教師だけ頑張っていけるような時代はとっくに終わっています。70年代、80年代で終わっているのではないかと思います。

これに対して今、国の動きを見ると、この間、国家戦略会議というところが7つの方針を出しました。そこで特徴的なのは、例えば、早期入学で大学へ高校2年生から飛び級で入ったりした子どもたちにも高校卒業資格を与えましょうというのを今、準備しています。

それから、学力のテストをしましょうとか、入学してから卒業するまでにどれだけ学力が大学でつけられたのかをチェックしましょう。そのことによって大学の教員をもっと

一生懸命やらせたり、学生の学習意欲も上がるようにしていこう。

全国750の大学の学長にアンケートをとった結果、75%の学長が、自分の大学の学生は勉強しないと答えています。非常に深刻な数字です。

それから、アメリカの大学生と日本の大学生の一週間当たりの学習時間の変化で見ると、日本の学生は一週間で6時間以上勉強するような子は34%ぐらいしかいない。ほとんど勉強しないという子が圧倒的に多数です。アメリカで、ちょっとしか勉強しないよという子は15~16%。

これは留学した人が皆感じるのですが、本当に日本の大学生は“幽霊部員”なんですね。だから、単位互換制度はどこも日本の大学は入っていませんけれども、どこかに入ろうと思っても入れてくれません。今、世界で一番大規模なのはボローニャプロセスという、ヨーロッパを中心に46カ国が参加した単位互換システムがありますが、もうレベルが全然違います。話にならないですね。

だから、秋入学なんかも一つのテーマです。僕の考えとちょっと違いますが、秋入学なんかで突破口を開くというのは一つかもしれません。ただ、それがすべてではまったくありません。そんなに甘いものではないです。だいたいレベルが低すぎて留学生が日本に来てくれないでしょう。

日本は文科省があって、県の教育委員会があって、市の教育委員会があって、学校と、縦に一本なんですね。これには締め付けがあります。学校評価、教員評価、学校選択の自由、常に一番末端だけが締め付けられて、掌握されている。

そうではなくて、逆方向の評価制度も入れないと。僕は文科省を解体し教育委員会もいらないという考えなのですが、そんな極端なことを言わなくても、下の人が上の人の評価ができる。相互評価で、全体をボトムアップ

していくような態勢をとらないと、学校の先生がものも言えなくなってしまっている。特に大阪なんかもひどいじゃないですか。10年前の東京の姿にそっくりです。

先生方も自由にものが言えて、自由な教材開発ができて、自由に授業がやっつけける。自由をどう保障するかというのが一番大切だと思います。

時間になりましたので、あまりまとまりませんでした。終わります。どうもありがとうございます。(拍手)